

インドネシア ——「中東」への相反したイメージ——

見市建 (岩手県立大学)

本号の特集はチュニジアを発端とした中東政治の激変をきっかけにしている。インドネシアにとって重要だったのは、数千人の在エジプト留学生の脱出といった非常に直接的な事柄に限られた。メディアではアジア経済危機をきっかけとした1998年の政変との対比や、エジプトのムバラク大統領とスハルトを比較する記事などが目立ち、インドネシアの現状や政権への不満と結び付けるような動きは皆無であった。したがって、中東の政変の影響は極めて小さかったといえるだろう。もっともこうした冷静で客観的な態度は現在の中東との関係を示しているともいえる。そこで本稿では近年のいくつかの現象を踏まえつつ、インドネシアの中東への多分に「アンビバレントなイメージ」を概観してみたい。

「中東」(Timur Tengah)という曖昧な地域概念はインドネシアでもよく使われる。そこでより具体的にイメージされているのは、サウジアラビアへの巡礼、サウジアラビアを中心とした湾岸諸国への出稼ぎ労働、エジプトへの留学、イエメンのハドラマウト地方出身のアラブ系インドネシア人、といったところだろう。あまり行儀のよろしくないアラブ人観光客、というイメージも上位に入るかもしれない。労働者の受け入れ先としての「中東」のイメージはこの十数年であまり変化をしていないように思われる。インドネシア人労働者の虐待や劣悪な労働環境についてのニュースが断続的に伝えられている。短期滞在の「中東」出身男性が一時婚と称してインドネシア女性を買うケースもしばしば問題視されている。

他方、宗教的権威としての「中東」との関係は変化しつつある。留学先としての「中東」の地位は相対的に低下している。ジャカルタの国立イスラーム

大学は教員に欧米の大学への留学を奨励している。筆者は同大学幹部から「いま中東に行ってもどうしようもない。日本でもどんどん留学生を受け入れてくれ」と耳打ちされたことがある。

しかしより一般的には、アラビア語の優位性が制度化され、聖地がアラビア半島にあるイスラームにおいて、アラブと「中東」の中心性が簡単に揺らぐことはない。現代インドネシア社会における宗教的な権威や憧れの土地としての「中東」について非常に象徴的だったのが、2008年に大ヒットした映画『愛の章句』(Ayat-ayat Cinta)であった。同映画は元エジプト留学生による同名のベストセラー小説を映像化したものであり、インドネシア人留学生ファフリをめぐる恋愛ドラマであった。ファフリはまわりの複数の女性に「モテモテ」で、物語のなかではトルコ系ドイツ人が第一夫人、コプトキリスト教徒のエジプト人が改宗して第二夫人となる。同映画がヒットした一つの理由は華麗なベールを纏う女性のファッションであり、アズハル大学、ナイル川、「アラブ式」の結婚式などエキゾチックな憧れの対象としての「アラブ」や「中東」そのものであった。他方でエジプト人男性はしばしば乱暴で「狂信的」な存在として描かれている。憧れとコインの裏表の偏見も垣間見られるのである。また、「狂信的」なエジプト人男性を諷め、「中東」の男女と堂々と渡り合う主人公のありようはインドネシア人の自信の表れ、および「中東」との関係の変化を示しているといえるだろう。

映画『愛の章句』の大ヒットのあと、イスラーム的なイメージを売り物にする映画やテレビドラマが数多く作られるようになった。『愛の章句』に見られたようなベールのファッション化は定着し、2000年頃

から登場していたテレビ説教師(拙著『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』第4章を参照)は手を替え品を替えメディアに登場している。なかでも中東との関係を考えるうえで、近年注目すべき「メディア・コンテンツ」がハビブたちである。ハビブ(ハバイブ、インドネシア以外ではサイドと呼ばれることが多い)は預言者ムハンマドの子孫とされるアラブ系住民のことである。ハビブはその血統からインフォーマルな宗教的社会的な名望家として尊敬を集めてきた。とりわけジャカルタではブタウィ人の宗教伝統と結びつき、ハビブに率いられた小規模な宗教集団が数多くある。こうした集団は神秘主義(スーフイズム)に見られるアッラーの名を繰り返し唱える修行(ズィクル)や聖者の墓や廟などへの参詣(ズィヤール)などの宗教実践を行ってきた。こうした集団によるズィクルが、大規模化しテレビで生中継されるようになったのである。

もっとも成功したハビブ・ムンズィールは弱冠 38 歳、インドネシア生まれだがハドラマウトに留学し、彼の集会ではしばしばハドラマウトの師匠からビデオメッセージが送られる。ムンズィールの人気とその宗教的権威は「中東」から得られていることは間違いない。もちろん預言者ムハンマドの生誕祭(マウリド)をはじめとする宗教の祝祭に大きな集会が開かれ、初期イスラーム史を紐解いた講話がなされる。しかしながら同時にテレビ局は「平和なインドネシア」といった企画としてズィクルを中継し、ムンズィール自身も毎回国民としての責任ある行動を支持者に求め、ジャカルタの治安当局やインドネシア政府への感謝の言葉を忘れない。ジャカルタ特別州知事、ユドヨノ大統領もその名を冠したズィクルの団体を持っており、ムンズィールは大統領らと共にイベントに参加することもある。

以上の例が示すように、「中東」や「アラブ」は宗

教的な権威としてまた憧れの土地として、またときに経済的な格差に基づく暴力性を伴うイメージとしてインドネシアにおいて想像されてきた。マスメディアによるイスラームのコンテンツ化や政治におけるイスラーム的シンボルの利用によって宗教的権威たる「中東」のイメージがしばしば顔を出す、それはあくまでインドネシアの文脈において消費されているのである。中東政変への突き放した態度もこうした背景から理解することができるだろう。